



ほぼ週刊 輝けとわに 第364号

2024.4.25

〒247-0005 横浜市栄区桂町84-14 TEL: 892-2155 FAX: 892-9241

横浜市立本郷中学校

ホームページ <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/jhs/hongo/>

校長 湊 浩一

【学校教育目標】 自ら学び ひとつつながり しなやかに未来を拓く人

【学校スローガン】 あ（挨拶） せ（清掃） か（感謝） け（けじめ）

死んではいけない

校長 湊 浩一

令和2年3月に市立中学校の女子生徒が自死しました。原因は同級生らによる「いじめ」だったとする第三者委員会の報告書が公表されました。ご冥福をお祈りするとともに、お悔やみを申しあげます。昨日、「再発防止に向けた校長研修」（指名研修）を受講してきました。本校は、しっかりといじめを認知しています。それでも、速やかに教職員向けの校内研修を行いたいと思いました。ただその前に、どうしても本中生の皆さんに向けて話がしたいと思いました。これまで「輝けとわに」で書いてきたことと同じかもしれませんが、読んでもらいたいと思います。

彼女が残した遺書には「迷惑をかけてしまった皆さん、本当にごめんなさい。なぜ死んだかという、いじめが辛かったからです。世の中の人たちにはいじめと判断してもらえないようなことだと思っています。それでも私には辛かった」と書かれていました。もし、自分の学校の生徒がこのような遺書を残し自死を選んだとすると、やりきれないだろうと思いました。彼女はとても辛かったでしょうが、残された家族はもちろん、当該教員の気持ちを推し量ると、自死を選ばせてはいけないという気持ちを強くしました。どうしたら、子どもたちの命を守れるのでしょうか。今回の事案は、最初の「からかい」をいじめと認知して対応しなかったことが、すべてのように思いました。最初のボタンの掛け違えです。そうならないためにも、学校生活で「いやなこと」があれば、教員に相談してください。学校全体で、解決に向けて取り組みます。約束します。

さて、警察庁が発表した資料によると、令和5年の小中高生の自死者数は513人でした。令和4年よりも1人減りましたが、中学生だけで見ると10人増という悲しい結果でした。なぜ、子どもたちは自ら命を絶ってしまうのでしょうか。文科省は、**学校的背景**（進路問題、不登校又は不登校傾向、学業不振、友人関係での悩み、異性問題、教職員からの指導・懲戒、いじめ）、**家庭的背景**（保護者との不和、保護者の離婚、経済的困難）、**個人的背景**（精神科治療歴有、独特の性格傾向、自殺をほのめかしていた、自傷行為、孤立感、^{えんせい}厭世）などを理由として挙げています。たしかに、一つ一つが重い課題ばかりです。しかし、自分一人が背負っている課題ではありません。同じような課題を背負いながらも、前向きに生きている人たちもたくさんいます。

本中生の皆さん、「死ぬ」ということはこの世から自分がいなくなることです。二度と誰とも会えなくなるということです。あなたに会いたい人がいても、あなたに会うことはできません。

「死ぬ」ということは、この世から存在がなくなるということです。もちろん、人の寿命は永遠ではありません。いつか命が尽きるときが来ます。だからこそ、そのときが来るまで人は前向きに生きるべきなのです。仏教では、4つの苦しみ（生きる苦しみ、老いの苦しみ、病の苦しみ、死の苦しみ）と闘うことを生きることとしています。たとえば、谷に落ちたドングリも、転がれば浮かぶ瀬があります。浮かぶことができれば、どこかで芽吹くことができます。生きていればチャンスはやってきます。何度でもいいです。死んではいけない。死んで花実はいけません。